



かどや通信

第46号

発行日：令和3年9月吉日

発行：かどや保存会

発行責任者：寺田 直喜／編集：廣野 克子

皇大生 なかまちを研究 〜かどやで成果発表

皇學館大學生による「中心市街地の活性化のための情報発信実習」鳥羽市」の成果発表会が八月一日、かどやで行われ、中村鳥羽市長をはじめ、市の関係者やなかまの住民、地域おこし協力隊のメンバーなど約二十名が参加した。

同大学では、伊勢市を中心に近隣の自治体と連携し、「伊勢志摩共生学実習」として、各地域が抱える課題解決に向けて、体験学習を行っている。本年度は、このプログラムを鳥羽市となかまちが受け入れ、六月から七月にかけて学生たちがなかまを訪れ、現状や町の魅力、課題などを取材した。合同会社 NAKAMACHI 代表の濱口和美さんは、なかまの現状や空き家対策等を説明。魚介の燻製で人気の魚寅の店主・杉田公司さんは、昭和中期まで鮮魚店として繁盛していた同店の歴史をは



製で人気の魚寅の店主・杉田公司さんは、昭和中期まで鮮魚店として繁盛していた同店の歴史をは

じめ、なかまが取り組んでいる屋号旗や黎明期の鳥羽の産業についての情報等を紹介した。長い歴史を誇る浄土宗の名刹・西念寺では写経にも挑戦し、かどやでは、館内を巡りながら同家の歴史や文政八年（1825年）に建てられた建物の説明等を聞いた。これらの取材をもとに、彼らを感じたなかまの魅力や課題解決案を、鳥羽市のホームページの特設サイト『とほる』に掲載した。

成果発表会では、まず実習内容全体を紹介。その後、『とほる』に掲載した記事について、執筆者たちが解説した。金胎寺（鳥羽三丁目）の山門の不思議な魅力を紹介した「絵になる街く物語を探して」、燻製の香りで魚寅に魅せられた「鳥羽なかままで発見！〜こだわりの旨味〜」、「町の人と『くん』ちは、『しませんか？』朝ドラ×空き家問題〜」は過去の朝ドラの舞台とリンクさせ、「まれ」や「あまちゃん」のような海の町で生活してみませんかと提案。同時に、鳥羽市の空き家状況も紹介した。さらに、「なつぞら」のように絵描きになる「スカーレット」のようにものづくりをやる、「まれ」のまち「パティシエ」

担当教諭（左）と発表者の皆さん



者」その質問が投げかけられると、しばらく思索してから「雑貨屋さん」と答えてくれた。

三人の発表は、地元民には思いつかない斬新な発想が盛り込まれており、参加者は「長年暮らしていると気づかないことに気づかせてもらって、目から鱗でした」と感想を話す。合同会社 NAKAMACHI の濱口代表も「二人ひとり違う目線で紹介してもらえて、とても良かった」と話していた。

今回は、かどやの発表はなかったが、『とほる』には掲載されている。学生さんたちの新鮮な目線でなかまが紹介されており、これも興味深い内容だ。ぜひ一度「J」を読ま。

<http://tobaru-life.jp/magazine/>

なる、など鳥羽での可能性を語り、「あなたは、鳥羽で何をしたいですか？」この問いかけで結んだ。会場から逆に発表

茶道具でタイムスリップ! 鳥羽藩主愛蔵の品も披露

八月の展示は「昔の茶道具」と題して、かどやの蔵に残されていた茶道具や、近隣の商家で使われていたものに加え、鳥羽藩主・稲垣家の愛蔵品など、約五十点が紹介された。

《江戸の名工の作品も》

かどやの茶道具は、江戸時代前期かと思われる茶匙や、短冊筆筒と呼ばれている細長い縦型の携帯用点茶セット等が展示された。お手前の道具を収納して持ち運びやすい小型の箱もあり、そこには江戸初期(十七世紀前半)の銘を馳せた京焼の名工・野々村仁清の茶碗が収められていた。仁清は、色絵の具や金銀を使う「色絵もの」と呼ばれる技法を習得。京焼を今日にみられるようなめでやかな作風に確立し、当時の新様式の頂点に立つ陶工として高い評価を受けた。また、多くの技術の高さにも定評があり、どんな大きさの器も均一な薄さに仕上げることができていた。



野々村仁清の茶碗

いわれている。かどやの茶碗は灰色がかつた薄緑色で、色絵(つけ絵)はないが、薄くて手触りのよい形が多くの技術の高さを物語っており、見学者のため息を誘った。

《鳥羽の町人文化を垣間見る》

昭和初期まで鳥羽三丁目(中之郷)で小間物屋を営んでいた商家の土蔵に収納されていた萩焼の急須や茶碗、茶さじ、なつめも展示された。かつては、茶道が根付いていた港町・鳥羽の町人文化の一端を感じさせた。

四丁目(奥合)の魚寅別邸の茶室で使われていた茶碗や風炉、釜、ついで等も展示された。魚寅別邸は、江戸時代には武家屋敷だった場所だが、現在の建物は旧国鉄の幹部の方の別荘として建てられたことで、特に凝った造りの茶室は秀逸だ。その後、魚寅さんが別邸とされ、時折茶会も催されたという。今回出展された茶碗は練習用とのことだったが、楽焼の黒楽と呼ばれる器も含まれており、茶道をたしなむ見学者を喜ばせていた。

《鳥羽城主・稲垣家の名品も》

今回は今回は、今年六月に金胎寺(鳥羽三丁目)の庫裏で見つけた鳥羽藩主・稲垣家に伝わる竹筒も披露された。この竹筒は、茶席で床の間

稲垣家の竹筒に見入る



飾る花をいける花器として使われていたもののように、稲垣家が鳥羽に来る前に、戦いで手柄をたてた時に与えられたもの

だと言われている。同寺が所蔵する経緯は不明だが、郷土史家の江崎満さんによると「金胎寺が歴代の鳥羽城主の祈願寺だったことから、幕末か維新の頃に、寺に納められたのでは」といふ。

ところで、鳥羽藩主といえば九鬼嘉隆が有名だが、九鬼家が御家騒動で国替えされた後は、内藤、土井、大給(松平)、板倉、戸田(松平)と、藩主が目まぐるしく交代した。しかし、享保十一年(1725)年に稲垣家が入封してからは安定し、幕末(1869年)まで続いた。江崎さんは「この展示を通して、約百五十年という長きにわたり鳥羽藩を収めた稲垣家の存在を多くの市民に知ってもらえたら」と話している。

「口十禍のため見学者はそれほど多くはなかったが、茶道を志す人たちは新聞や口十の展示を知り、

足を運んでくれて、いいものを見せていただきました」と喜んでくれた。

《茶道具展示ができるまで》

八月の展示が決まらず焦っていたところ、かどやの所蔵品を一人で全てリストアップした教育委員会のフミタカさんが「茶道具はごうや」と提案してくれた。ただ「数が少ない」と聞き、「はて、ごうや」となったが、カヨさんが「魚寅さんの別邸の茶室はすばらしいので、道具も立派なはず」と言うことで交渉し、快諾してもらった。

展示の準備を進めていると、(前述の郷土史家)ミツルさんが「金胎寺ですごくいいものが見つかったんよ」と、息せき切って報告に来てくれた。なんと「玉」として展示することになった。

飾りつけには、フミタカさんに金胎寺の長谷住職、ミツルさん、茶道教室のイシ子先生とまゆみさん、カヨさんがかけつけてくれた。イシ子先生とまゆみさんはお花もいけてくれて、近所に住むイシ子先生はほぼ毎日花の様子を見に来てくれた。

八月の展示はごうやの心とかが心配したが、そんなこんなで、非常に価値ある展示になり、スタッフ一同、胸をなでおろした。

野の花に寄せて

「万葉の会」講師に聞く

「野の花と万葉の会」がまもなく二十回を迎えようとしている。N.Y.J.R. 案内人（巷）は講師と呼ぶのが佳代さん。野の花と万葉の世界にどうなっていくか、華道家の（まゆみ）さんに万葉の会における野の花への思いを書き添えていただいた。

《野の花で昔を今に》

三年前の五月に、年号が「平成」から「令和」に改元されたことを記念して、かごやでも万葉集の講座を始めようということになりました。N.Y.J.R. のような講座にしようかとスタッフで「夢」を語り合いました。「大広間で、屋根のあちこちからから集まってくる光と風と、庭の草木のそよぎなどを感じながら、ゆつたりとした時間がもたらいいなあ」「部屋には野の花がさりげなく活けられていて、それが万葉の花に思えば、その和歌も紹介して……」「会の中で、ブレイクタイムがあるといつねー「コーヒ」やほじい茶をいねいづいて、じいおはお抹茶なつかも……」。「わたしの夢をすずくして話め

込んで「野の花と万葉の会」は始まりました。

「口大禍で、二回の中止を余儀なくされましたが、熱心な参加者の皆さまのお陰で、会はまもなく二十回目を迎えます。

思い返せば活けられた野の花は、ほとんどが万葉集につながったものばかり。はじめてのアジアンタム・ふじい・ねじはなひえべにはなろつばい・ひおぎぎ・たちはな・とこづら・おもたか・やまあじさい・たであし・すがの・かんぞう・をばな・かや・からむし・のびるちばな・つゆくさ・なでしこ・あしびうのはな・まゆみ・やますげ・りんどう・竹・ききょう・むくげ・ひるがお・つばすみれ……。季節の光と風をまとった野の花たちを、玄関や床の間や仏間に……と活け続けていただきました。

野の花と万葉集にうたわれている和歌をマッチングさせた講座は、活け花担当の（その）も万葉花のひじいもあまのまゆみさんの



並々ならぬ野の花への愛着と活け花のセンスと技術がなければ実現することはできなかつたでしょう。

その花たちをすてきな笑顔で眺めて、「あそここんな可愛い花が咲いていたな」と話しに花を咲かせてくんだら皆さまと共に、「これからもいい時間が過ごせますように！」

《万葉の花にふれて》

夏の太陽の恵みを燦々と浴びた木々に時折さわやかな風が心地よく、しだいに秋めいて季節が巡る。

今月の野山には何の花が咲いていくか知らずと、万葉集に歌われた草花探しに飛びまわります。時には、毎回参加しておられる方から「自宅に咲くたくさんのお花を頂戴し、万葉の会の当日に備えます。」

昨今は、子供の頃によく見かけた野の花も道路が整備されたり、環境の変化でだんだんと見られなくなっている事に寂しさを感じます。

雑草と思われる小さな花も、実は万葉集に歌われていることが多々あります。「の自然を残してほしい気持ちでいっしょにがんばります。」

「花は野にある

姿・枯淡素朴」を真髓としています

華道・山村御流の教えに沿って今月の野の花を活けさせて頂いております。

器選びとお花の取り合わせを考え、自然のなかにも尊い姿を見逃すことなく、枝の落しようにも驕らぬように……。

花と語り、花の姿を整わせ、自然の美しさを導き出す私の時間は、会を始めた最初の頃と比べ、フレッシュから、今は悦びへと変わりつつあります。

佳代先生のナビゲートにより、万葉びとの暮らしや心豊かに生きた時代に触れることができ、また、参加の皆さまと共有させていただく貴重な時間に感謝を申し上げます。

これからも巡る季節のお花との出逢いを楽しみに、野の花を求めて野山を駆けまわりたいと思っております。

(まゆみ)



夏はゆかたドレスで！ 岡千ヨコ特別展開催

「岡千ヨコゆかたドレス展」が八月一日から二十二日まで開催された。岡さんは着なくなった和服を斬新な洋服に仕立て直した「きものふく」が人気で、かどやでは過去二回展示会を行った。今回は、浴衣地を使った涼し気な作品七点が披露された。会場は一階の六畳間だったが、マネキンを使って立体的に飾り、花火が描かれた半幅帯や夏用のバッグ等で、岡千ヨコ・ワールドを見事に表現した。見学のお客様からは「数が少ないのは残念だけど、さすがね」とのコメントをいただいている。

実は、今年五月に展示会を予定していたが、三重県が新型コロナウイルス感染症拡大防止のため緊急警戒



宣言を四月二十日から五月九日まで発令し、五月三十一日まで延長防止等重点措置がとられたため中止する

ことになり、岡千ヨコ・ファンをガツカリさせてしまった。

ところが、八月の展示が決まらず困っていると、「ゆかた地でドレスを作ったので、数は少ないけれど、にぎやかに飾りましようか」といううれしい提案をいただき、特別展実現の運びとなった。

「コロナが落ち着いたら、是非「きものふく展」を実現したいものだ。

花を求めて、どこまでも！

まゆみさんの野の花愛

三ページに投稿いただいたまゆみさんは、テーブルコーディネートの人気教室「まゆみ塾」の講師であり、「花は野にあるように・素朴枯淡」を真髄とする華道・山村御流の教授の資格を持っている。その人となりは文章同様、上品で美しい。

万葉の会では、活け花を担当し、花の調達もまゆみさんが行うが、題材が野の花だけに花屋に注文するというよりは、花を求めて野山を駆け巡っているそうだ。普段の楚々とした佇まいからは想像しがたい逞しい姿(お転婆娘風)で、花ばさみや鋸等を携え、会に適した野の花を求めて山に分け入るが、蛇に遭遇し震え上がったこともあったと言っ。

それにしてもただの雑草にしか見えない花たちが、まゆみさんの手にかかると、優しくたおやかに見えるから不思議だ。

時間区分 部屋	午前	午後	全日	冷暖房設備 利用料
	10時～12時	13時～16時	10時～16時	
座敷南(10畳)	500円	600円	1,100円	500円
座敷北(8畳)	400円	500円	900円	—
仏間(6畳)	300円	400円	700円	—

- ・営利目的の場合は、料金表の10割増しとなります。
- ・鳥羽市民または市内勤務者以外の利用は、料金表の5割増しとなります。
- ・許可された利用時間を超過する場合は、割増料金が発生します。
- ・冷暖房費は、全日使用の場合は2倍になります。

◆◆貸部屋の案内◆◆
かどやを有効にご利用いただくため、一部の部屋を貸部屋として貸し出しています。茶話会や勉強会、展示会などに活用ください。
詳細は、かどやへ。
電話〇五九九―二五―八六八六

かどや保存会 令和3年度会員募集開始！

かどや保存会は、歴史的な文化財である「鳥羽大庄屋かどや」の保存ならびに効果的な活用・運営をめざして活動を続けており、当会を支援して下さる会員を募集しています。

ピーク時の平成30年度は会員数351名でしたが、残念ながら以後毎年減少しております。しかし、コロナ禍にも関わらず、令和3年度は9月15日現在約250名の方から継続のお申込みをいただきました。皆様からのご支援、心より感謝いたします。コロナの収束にはまだ時間がかかるものと思われそうですが、感染防止対策を強化しつつ、皆様の憩いの場所となるよう、これからも日々努力を重ねてまいります。手続きがまだの方も引き続きご支援いただきますよう、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

令和3年度(令和3年4月1日～令和4年3月31日)の年会費(1口2,000円)は、継続・新規を問わず、以下の方法で納入してください。

(1)手渡し：かどやにお越しいただき、直接事務局にお支払いいただく。

(2)銀行振込：郵便局 普通 かどや保存会 00850-4-151751